

時評

静岡県にはクスノキの巨樹が多い。熱海市・来宮神社の大クスノキは幹周りが二十三メートルを超



佐藤 洋一郎

(総合地球環境学
研究所教授)

え、幹周りでは日本第二の威容を誇る。伊豆に他にも、幹周りが一〇メートルを超える巨樹が多数あり、中でも北伊豆一帯はクスノキ巨樹のちよっとした群生地のような様相を呈している。北伊豆はすでに記紀のころからクス

県内のクスノキ

ノキ巨樹の群生地だったようで、大和の王権が伊豆の国に命じてクスノキの舟を作って納めさせたというような記載が見られる。

県下のクスノキの巨樹のDNAを調べてみると、彼らが互いに似通ったDNAの配列を持っていることがわかる。どうやら

になり今に命をつないでいるのだろう。

クスノキは船材以外にも用途の広い樹木である。クスノキは近世以降、樟脳の原料として注目を集めた。クスノキの材で

作った家具やテーブルは虫を寄せつけないというし、クスノキの家具のある家に入ると、クス

ことは、クスノキにとっては必ずしもよいことばかりではなかった。特に樟脳の原料として注目を集めてからは多くの巨樹が姿を消したといわれる。

巨樹は、どの樹種の場合にもそうだが、クスノキの巨樹については特に風格を感じさせる。のた打ち回るかのようにくねる

枝は、かつて隣にいた競争相手との日光の争いの歴史を物語る

巨樹の歴史に思いはせ

県下の巨樹たちはごく限られた数の祖先に由来する、縁の近いものたちであるらしい。県下の巨樹たちは、もとは人によって運んでこられたごく少数の株の末裔たちなのだろうか。むろん人びとが運んだのは巨樹ではなく苗木か種子であっただろうが、そのうちのあるものが巨樹

ノキ独特のよい香りがする。県下にはクスノキの材で仏像を彫る人もいて、用途もなかなか多様だ。先日ある人から、クスノキのチップを家の周りに撒いておくとムカデよけになるのだと聞いた。ムカデに悩みを持つ方々にはぜひお試しいただきたいと思う。このように用途が広い

る。樹皮に刻まれた深い筋はとぎには幹の周りを一周して、樹木全体が長い時間をかけて身をよじらせたことを教えてくれる。彼らの生は、おそろしく苦難に満ちあふれていたに相違ない。しかし逆に、その苦難の相が、材としての彼らの価値を落

の難を逃れてきたともいえる。そろそろクスも新緑のころを迎える。巨樹たちのそうした歴史に思いを馳せながらその下を散歩してみるのもよい。晴れた日に彼らが発散する微香はじつにすがすがしく、きっと私たちが健康にしてくれるにちがいない。巨樹の存在は、それ自体が人にとって意味あるものと気づかれることと思う。

執筆者略歴

大塚 洋一郎氏

京都大学大学院農学研究科修士課程修了、静岡大助教授を経て2003年10月から現職。植物遺伝学専攻。著書に「稲の日本史」(角川書店)、「DNA考古学のすすめ」(丸善ライブラリー)など。